Architectural Institute of Japan

日本建築学会大会学術講演梗概集
（関　　東）２００１年９月

日本モダニズム創生期における言説の論理構造

正会員　○太田　英和＊
同　近藤　正一＊＊
同　若山　滋　＊＊＊

言説、 モダニズム、 論理構造、 概念、 価値観

【研究目的】建築家は常に様々な社会的概念や時代思潮、ムーブメント等の存在に囲まれながら、独自の価値観をもって表現活動を行いつつ建築家相互間で様々な論を提起し合い建築論を展開させている。建築評論においてある対象に対する価値観は肯定と否定の対置関係によって明確に現される場合が多く、そこには時代を越える普遍的な論理構造がある。それを明らかにすることはその時代思潮を明らかにするだけでなく、現在の建築論を理解する上でも、重要な指標となる。本研究では言説の論理構造に着目し、評論における論理展開のされ方及び議論の対象を明らかにすることを目的とする。

【研究対象】ここでは対象期間を日本モダニズム創生期における一大転機であり、論が盛んに議論された震災後５年間の1924年から1928年までに注目し、その時代に刊行されていた代表的な建築雑誌である『国際建築』、『建築世界』、『建築雑誌』、『建築と社会』を対象文献とする。

【研究方法】 1）対象文献４雑誌に寄稿された、建築評論の中から論者がある対象に対して批評を述べ、尚かつ同時に論者の価値観が明確に示されている部分をキーセンテンスとして抽出する（図－1）。

2）論の内容を示すものであり、尚かつ論者が肯定的・否定的に使用しているキーワードを抽出する。

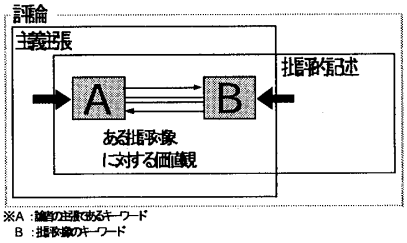
3）抽出したキーワードをカテゴリーへと分類する。

4）肯定的・否定的に使用されているキーワードには主要な対置的傾向がある事に注目し、キーワードの相関関係を明らかにする事によって、その時代の論理展開、及び議論の対象を探る（図－2）。

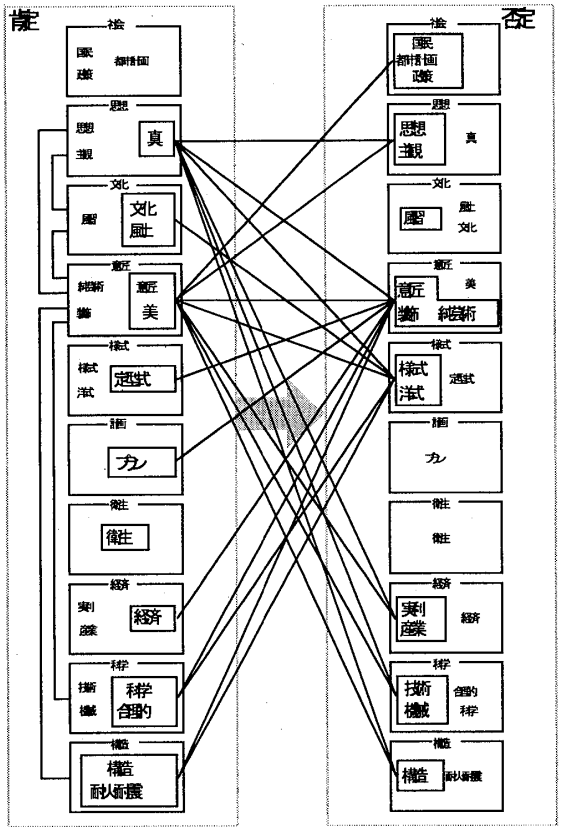
5）キーワードの相関関係に建築家を対応させることにより、論の相関関係、及び建築家の論理構成を明らかにしていく（図－3）。

【キーワードの相関関係】図－２より10種のカテゴリーに分けられた様々なキーワードにはそれとは対置的な関係をとるキーワードが存在し、論者がある対象を批評しつつ自身の見解を論じる時、キーワード間には、下記のような「肯定」⇒「否定」の対置的関係がある。「構造」・「科学」⇔「意匠」、「構造」・「科学」⇒「様式」、＜風土＞⇒＜洋式＞、＜内側（プラン）＞⇒＜外側（意匠）＞、＜経済的＞⇒＜装飾＞、＜美＞・＜真＞⇒「社会」・「思想」・「意匠」・「様式」・「経済」・「科学」・「構造」等である。また「思想」・「意匠」・「科学」・「構造」は常に論の中心に存在している。一方＜真・文化・風土・美・プラン・衛生・経済・科学・耐火耐震＞等は様々なカテゴリーにおいてそのカテゴリーの根幹となるもの若しくは社会通念において是とされるものであり、否定されていない。以上のような関係から、ある時代の根本となるキーワードと、その対置にあるキーワードを知ることが、その時代の論理展開のされ方、議論の対象を知る重要な鍵となる。

【建築家の論理構成】建築家は常に自身の周囲にあるムーブメントに対して常に自己の独自性、価値観を示し、自己の持つ理想像へと建築界を導こうとしている。それが時には一方で肯定し、また一方では否定する立場をとることに繋がる。この時代においてこのような傾向が見られる概念



図－１　評論抽出対象



図－２　肯定的・否定的キーワードの関係

The logic structure of the *discours* about the Japanese modernism generative period

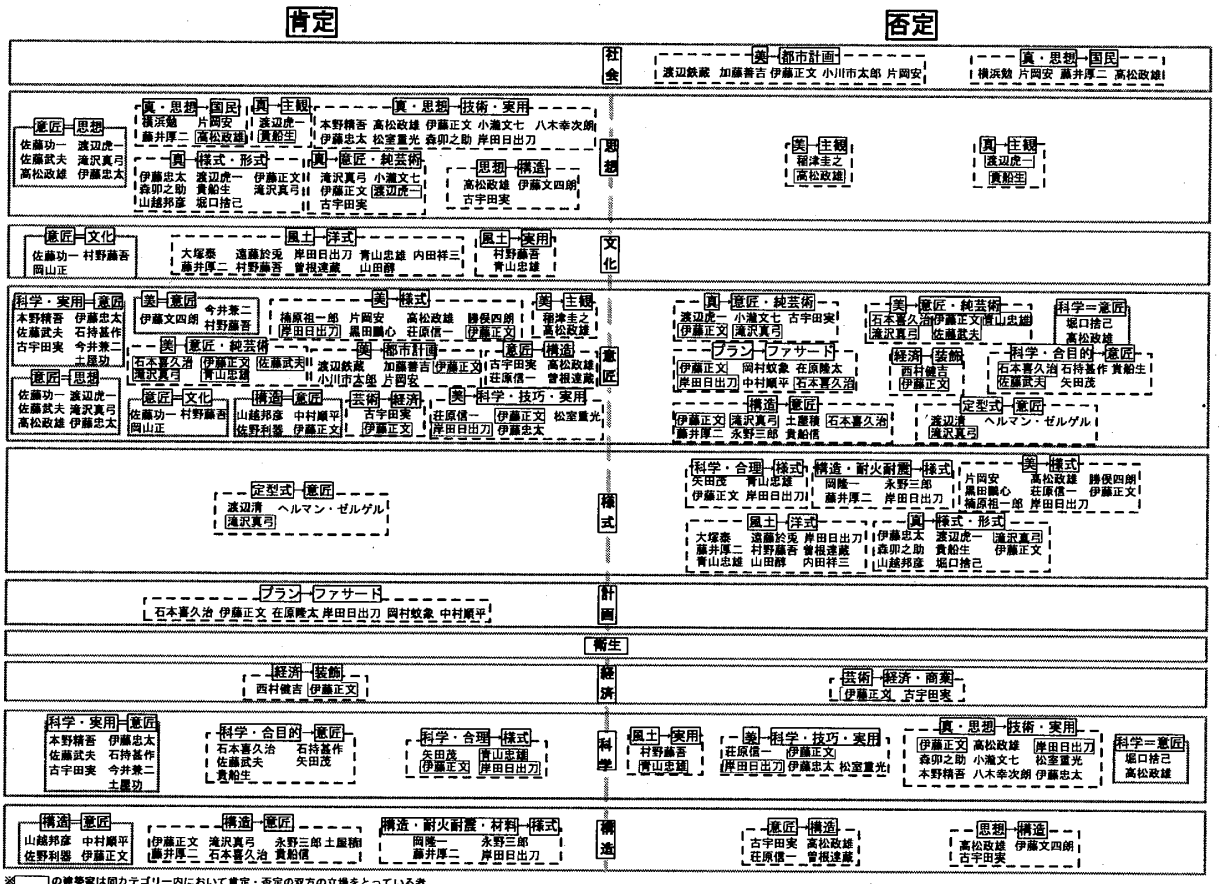
OTA hidekazu, KONDO shoichi
WAKAYAMA shigeru

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

が「思想」・「意匠」・「科学」・「構造」であり、これらの概念はこの時代において、ある意味では同じ範疇に入る共通のテーマであると考えられ、一人の建築家の中でも肯定的・否定的の双方に使われている。このように論が矛盾を起こす原因として考えられるものに部分肯定（部分否定）があり、「Ａだけでなく Ｂもなければならない」ということによって、ある対象への批評を曖昧にし、明確にある対象を否定する事を避け、間接的に対象を批判し、自身の見解を示す。別の原因として、様々なムーブメントに対して論じ、対象となるキーワードと対置的なキーワードを打ち出し続けることによる評論手法をとることが考えられる。以上のような論理展開をしている建築家の代表例が高松政雄・伊藤正文・岸田日出刀・滝沢真弓等であった。彼等は様々な概念・通念に対して自身の価値観を示し続けた。複数の価値観が同時に表されることが論者の価値観を曖昧に、時に矛盾しているかのような論法の原因となっている（図－３）。

【結論】1923年に起きた関東大震災により建築家の建築に対する概念が、大きく揺れ動き、近代機能合理主義の流れへと発展していく。この時期においてそのムーブメントは未熟であり建築論の大勢とはならず、それまでの通念と対立し様々な論がおこった。しばしば建築家は異なる概念に対して同等の価値を見出す。それがある対象に対し評論をするにあたって、ある論では肯定的立場を取りながらも、別の論では否定的な見解を示すなどの矛盾の原因となり、直接的な批評を避け間接的な批評を行い、様々なカテゴリーに対して対置的な論者の価値観を示し続ける論理展開に繋がる。この時代の建築家は＜意匠＞・＜思想＞・＜構造＞・＜科学（機能）＞等のキーワードをそれぞれ肯定・否定両方で使い、対置的若しくは対等的に用いた。これ等はまさにモダニズム創生期の根幹をなし、盛んに議論されたと言える。「文化」・「計画」・「環境」以外の論争の中心にあるのは「美」・「真」という意識であり、すべての建築家がこれを是とし、この意識から論を展開している。これこそがこの時代において総ての建築家が共通に持っている価値観であり、理想であった。「美」・「真」に伴って生まれる価値観こそが「意匠・芸術の美」であり、「構造・機能の美」であり「真の建築」であった。論者の価値観から様々な概念が生まれ、他者との概念の衝突によって新しい概念が生み出される。それがそれまでの価値観を揺るがし、更なる価値観となる。即ちこのような連鎖反応的相関関係が様々な論の展開される構図であり、根本的論理構造であると言える。



図－３　建築家の論理構成

*　名古屋工業大学社会開発工学科　博士前期課程・学士（工学）
**　日本文理大学工学部建築学科　講師(工学)
***　名古屋工業大学社会開発工学科　教授・工博

*　Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban Engineering and Cvil Engineering, Nagoya Institute of Technology, B. Eng
**　Lecturer, Dept. of Architecture, Nippon Bunri University, M.Eng.
***　Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Cvil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng

NII-Electronic Library Service